大学出版

'95 春

No. 25

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
25号

Spring・1995

読書の周辺　人の「死」をめぐる建築 ―― 八木澤　壯一　1
読書の周辺　吉田健一の季節 ―― 島内　裕子　6
■第13回日韓大学出版部合同セミナー・レポート
日・韓大学出版部活動の共通項 ―― 渡辺　勲　11
―実りある交流の前提を探る―
第16回（一九九四年度）日本生命財団出版助成図書 ―― 19
大学出版部ニュース ―― 20
新刊案内'95・1～'95・3 ―― 26
製作の現場から 10 ―― 表3

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

人の「死」をめぐる建築

八木澤　壯一

永六輔の『大往生』が岩波新書として破格の売行きを記録したり、新聞や雑誌もそれに関する特集を繰返し組むほど、「死」が身近になってきたのであろうか。その矢先に阪神大震災である。多くの老人を含み五千人を超す死者を出す大惨事である。淡路島北端から明石海峡をへて神戸市内を海岸線に平行に走る幅二キロ長さ三〇キロの断層の上に激甚被害が集中した。古い在来軸組構法の木造住宅に止まらず、鉄筋コンクリートや鉄骨造の建物も破壊した。

救援の手とともに、亡くなった人達への対応もこれまでにない規模であった。葬儀業者の団体も急遽二千本を超す柩を急送し、その後の対応に追われた。火葬も、被災地の火葬場では火葬炉の倒壊に加えて燃料の確保ができず、仮設の火葬炉を場内に設置したり、大阪はもとより周辺の火葬場に遺体をヘリコプターで移送し、昼夜を問わずに火葬を続けたという。それにもかかわらず混乱にまぎれて検視もせずに埋葬された遺体もあったと報じられた。小学校で営まれた合同の慰霊祭では不揃いな骨箱が並ぶ事になった。

私は、生まれ故郷の火葬場が焼失した後、新たに建設する際に設計したのが縁で、火葬場についての建築研究を手掛ける事になった（一九六八年）。その時期が日本の火葬場の変革期でもあった。一つは火葬場を地域の基本的な施設として、その建設と管理運営について行政の中で位置付けが試みられていた。一方、火葬炉自体も周辺住民への配慮から技術革新による変身が進み始めていた（写真：妙有院）。

火葬場という施設を中心に、人の「死」にかかわる病院の霊安室、葬儀式場、墓地・納骨堂を含めてその空間の在り方を、建築学の課題として、かれこれ四分の一世紀にもなる長い間考え続けてきた事になる。その成果を建築学の体系の一つとして取りまとめ、一九九二年には『火葬場を中心とする葬祭施設に関する一連の研究』として日本建築学会賞として認められる事になった。これも「死」を正面に取り上げざるを得ない時代の故であろう。「死」に関しての論議は研究を始めたころは、ややもすればタブー視されていた。当時から比べれば、「死」が日常的に語られるよ

妙有院（新潟県巻町ほか組合立火葬場）　左（1968年の建築）煙突を建築デザインの中に取り入れた。右（1988年の増築）火葬炉の改善で排気筒処理により煙突が見えない。

うになってきていることに驚いている。

葬式や火葬への関心がどうして建築学と結び付くのかをよく問われるが、それは日本の建築学がもつ特色と、葬祭がもつ建築への期待の大きさによるものと考えている。

前者は筆者の専門分野である建築計画学によるところである。この学問は、建築が持つべきソフト面での性能を一般化しようとする所にある。使い勝手というようないわば機能と言い替えてもよい場合も多い。住宅でいえば間取りと各室の規模を理論的に解明しようとするようなものである。したがって、それぞれの空間とそこで展開される生活行動のあるべき姿との関連性を追い求める事になる。特定の個人や家族であれば、その人たちの考えにより一応の回答が得られる。が、一般には集合住宅や分譲住宅のように、不特定多数を対象とした、使用者がはっきりしない施設が大半を占めている。こと、火葬場についてみれば、誰がきちっと要求してくれるかが極めてあいまいである。さらに使い手すら特定できない事が考えられる。このように火葬場ではしっかりとした代弁や解明が望まれる事になる。

後者は葬祭施設の本来の機能にある。住居、学校、病院などではその使いやすさが、ホテル、事務所などではそれに加えて不動産としての投資効果が求められる。火葬場としていえば、そこで求められる機能はなんであろうか。従来の施設が遺体の火葬という処理だけに意識が向けられ、葬送という面を大切にする配慮が欠けていたという視点が、

私の研究の原点である。かけがえのない身内や友達と最後の告別にあたる場所である。そこには心理的、精神的ないたわりのある空間が求められて当然である。それは「建築」のもつ空間機能そのものであると考えたからである。

この両面から、建築研究の素材として火葬場の奥行きに限りない魅力を覚えたわけである。

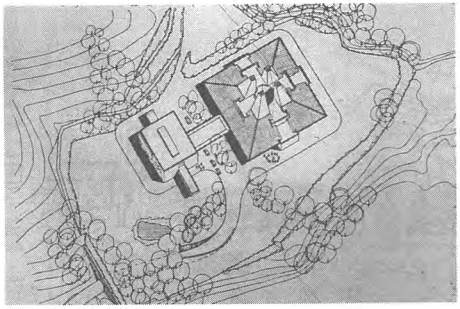
今でこそ、この方面の「本」も書店でコーナーができるようになってはいるが、研究を始めたころは皆無に等しかった。幸い大学が神田古書街に近い事もあり、分野の違う本漁りに励んだ。歴史、民俗、文化人類学、社会学、風俗と芋づる式に細い糸を手繰っていく事になった。建築設計に結び付けるには具体的な記述が不可欠になる。全国の自治体が刊行する歴史や統計、特に戦前のものが役に立った。火葬場建設の経緯には当時の議会議事録、許可申請の書類などまで探し求める事になる。

また、拙著『火葬場』（共著 一九八三、大明堂）を引用した著者から本が送られてきたことにより細野雲外の『不滅の墳墓』（一九三二、巌松堂書店）を知り、大阪府立図書館まで閲覧に出かけたこともあった。その本を神田の古本屋で見つけたときには嬉しくなってしまった。昨年、山梨県の峡東地と言われる東八代郡の青年会議所のメンバーから声をかけられた。これも最近ようやく脚光を浴びてきた火葬場などの作品集である『葬斎場・納骨堂』（共著 一九九四、建築資料研究社）での拙文が縁である。

「この数年来、地域まちづくり活動の一つとして環境問題を取り上げているが、その最終点で『夢ある葬祭場』の提案をしたいと考えている。ついては専門家として支援をお願いしたい」との事であった。これまでも火葬場の建設にかかわり、設置者や地元住民の相談に乗ってきた。山梨県は日本の中でも土葬の習慣を根づよく残し、地域によっては埋葬する場所と、墓を造る場所を変える両墓制がまだ見受けられる。火葬場は伝染病で亡くなった人を対象にしており、大きな町にしか設けられていなかった。そのような背景からこの地域には火葬場がなく、他の地域の施設を利用させてもらう事になっていた。

東八青年会議所は、地域のためになる活動として河川敷地を利用しての公園づくり、ごみ問題の解決としての清掃工場の建設などを積極的に取り上げてきた経験をもっている。火葬場の建設運動として評価すべき点が多いので研究室としても大学院生なども一緒になって現地を見たり、アイデアを図面や模型で表現したり、集会にも参加した。「峡東にこんな葬祭場ができたらいいな」というキャッチフレーズでモデル地区を想定し、そのイメージづくりに励んだ。その間に何回となく地元の人たちも含めて議論できるチャンスがあった。

葬祭場がもつべき条件として、遺体の単なる処理場ではない事、地域の風土性をもつ事、弔う気持ちが表現できている事の三つの柱を立ててみた。まず処理場でない葬祭場



京都市中央斎場　筆者が基本調査から設計にまで参画した人口 200万人を対象とする大規模火葬場。
上は都市計画決定の段階で提示したスケッチ。谷あいをトンネルを抜けてのアプローチ，全体で24基の火葬炉を6基ずつの4つの火葬場の集合体で計画。
右は京都らしい表現の告別ホールの斎壇。

である。火葬は明治維新の政策より、明治六年に全国的に禁止された。しかし、実情に根差さなかった事と、伝染病などの公衆衛生的な面から火葬の容認が不可欠となった。明治八年の火葬再開から、必要悪としての火葬場を取締の対象として位置付けてきたと考えられる。習俗として定着してきた地方では、一時葬としての火葬を柳田国男が指摘している。そのような儀式の場面として、さらにまちづくりとして重要な施設であり、コミュニティを形作る要素としての火葬場を考える必要がある。

第二点は、峡東ならではの葬祭場である。日本中どこでも同じ、いわば金太郎飴のような火葬場ではよくない、峡東で生を全うした、その心象をつくりたいと考える。地域の風景を象徴するような火葬場の雰囲気が不可欠である。例えば「桃源郷」もその一つであり、川と扇状地、峡東の特色ある地形も生かしたい。三点目は送る人、送られる人にとっての葬祭場という視点である。ある人の「死」を悼むために、万難を排して集まってきた人達、送る遺族ら集団としての独立性が大切である。火葬炉が一列に数多く並ぶ大量処理的な雰囲気は当然避けなければならない。一方、この地で生を全うした人をみんなで送り出す空間としても位置付けると、そこに集まった人達がグループを越えて交流する場所の可能性も考えたい。この事が個別化とオープン化、個人葬・家族葬・地域葬への対応である。

このような条件を設定し、具体的に峡東での葬祭場の考

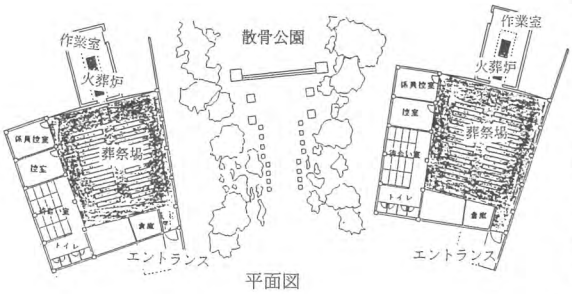
えられる形式を探って行った。その作業のなかで火葬場のイメージを《土葬》《野辺送り》《荼毘》の言葉に絞り上げてみた。まず土葬イメージタイプである。山梨は伝統的に土葬で火葬化が最も遅かった地域である。葬送については伝統を受け継ぐ事が多く、現行の慣習を重視する事も必要である事から、このタイプを考えた。別離の儀式の中で、「沈む棺」や欧米で見られるように職員が棺を引き取る形も考えられる。欧米の火葬はキリスト教で長い間禁じられてきた歴史をもつが、近代の合理思想の中でヨーロッパで再開する。土葬の代替として出発した事から焼骨を見る必要がない、すなわち骨上げなしの形式になる。火葬炉は地下などほとんど意識されない場所に造る事になる。

次が野辺送りタイプである。自宅での葬儀式それに続く墓地での埋葬、その間に野辺送りがあった。この伝統的な慣習を評価しようとするものである。葬儀の場所から火葬の場所までに野辺送りの行列を組む。野外的な雰囲気で全天候型の空間になろう。自宅での葬儀でも、ここ葬祭場に到着してもゆっくりと野辺送りの空間を進む事になろう。

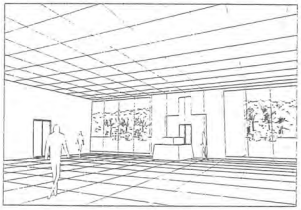
そして荼毘タイプである。自然の中での火葬、火葬そのものを儀式の中に取り込もうとするタイプ。通夜、葬儀、火葬、骨上げ、精進落としを同一な空間で展開しようとする。古代ローマでは街の広場で、インドでは聖なるガンジス川のほとりで儀式として火葬が行われてきた。火葬を本来の意味に立ち返り再構成するものとも考えられる。火葬も集まってきた遺族ら自ら行う事になるかもしれない。

人の「死」に関わる施設のありかたは、死者の意志を尊び、残された人達の追憶の空間づくりである。その形式はまさに多様であろう。この地球に一時生を受けた人々の証しをどう受け止め、どう生きるかを問われていると思える。これらの願いを受け止めそれを具体的な空間に組み上げていくかが、まさに建築の課題なのである。

（東京電機大学工学部教授）



平面図


室内スケッチ

峡東の斎場　平面図に見られるように，個々の斎場に火葬炉を設け，別れを告げるグループの独立性を強調。室内スケッチは，斎場の中から桃畑が見えるなど峡東ならではの風景を取り込んでいる。

吉田健一の季節

島内裕子

1　犀川暮色

三年ぶりの金沢は雪だった。本多町の石川県立図書館李花亭文庫で、夕方まで『徒然草』関係の写本や版本を閲覧調査して外へ出ると、街は青灰色に包まれていた。折よく来合わせたタクシーを、犀川大橋のたもとで降りて雪の犀川を見渡した時、この光景を吉田健一も眺めていたことを思い、感慨深かった。

吉田健一晩年の作品『金沢』は、毎冬の金沢滞在から生まれた傑作である。吉田健一の当地での常宿は、犀川を見下ろす「つば甚」で、忍者寺として名高い妙立寺のあたりをよく散策したという。忍者寺のことも『金沢』の第三章に書かれている。

ところで、忍者寺のすぐ近くに三光寺というお寺がある。門前に立っている金沢市の案内板によれば、この三光寺は、「紀尾井坂事件」の拠点となった寺だという。つまり、明治の元勲大久保利通を暗殺した島田一良たちの集会所であった。大久保利通といえば、吉田健一にとっては曾祖父にあたる人物である。吉田の母方の祖父が牧野伸顕で、伸顕は利通の次男である。案内板の説明を読んだ時、『金沢』の冒頭近くが、ふと心に浮かんだ。主人公内山の金沢の別宅のたたずまいは、次のように描かれている。

犀川の河畔にたたずむ筆者

> 例えばそこがどういう具合にでも表向きと実際が違う類の人間が集って密議を凝す為にその一人が持っている家だったのでもよくて、それならばその家がそういうものでなくて昔は金持だった男に死なれて今は年取った女が一人でひっそりと暮していることからやはり人間の住居と呼べるものであっても少しも構わなかった。その他にこれまでに書いたことだけからならばどのようなことでも考えられる。併しそこの持主は一人の男で又その家を密議の場所に使っているのでもなければ必ずしもそこに住んでいるとも言えなかった。

吉田健一特有の、読点の少ないややわかりにくい文章で

あるが、書き手が主人公の住まいを設定するまでの自在な心の動きがよく描き取られている。ここで住まいのたたずまいについて二度も「密議を凝す為」「密議の場所」と書いていることが以前から気になっていた。なぜわざわざそのような書き方をしたのだろう、という疑問は、三光寺の案内板を読んだ時、氷解したような気がした。自分の曾祖父にまつわる事件を、さり気なくこの作品に織り込んでいたのではないだろうか。

講談社文芸文庫版『金沢』の解説で四方田犬彦氏は、この作品が、泉鏡花ゆかりの浅野川あたりのことを無視し、犀川からの見晴らしが中心になっていると捉え、そこに「無意識的な空間支配の欲望」や「吉田茂と牧野伸顕の血を引く明治四十五年生の文学者の感受性の枠組み」を読み取っているが、そのような把握の仕方が、この優雅な作品の本質を透視しているとは思えない。

唐突な比喩かもしれないが、むしろ『金沢』の住まいの位置設定は、『源氏物語』の六条院が六条御息所の故地に造営され、それによって彼女の鎮魂となっていたような心性の現われと捉えたらどうだろう。すると『金沢』で繰り返し語られている生と死への深い洞察に満ちた言説の意味も、納得できるように思われるし、父祖の時代への鎮魂歌でもあるように思われるのである。

数ある吉田健一の作品の中で、とりわけ世評の高いのは『ヨオロッパの世紀末』や『時間』などの批評であるので、ともすれば彼の文学世界は外国の文化や文明に基盤を置くものと見做されやすく、日本文学との関わりについては、吉田健一を論じる場合にあまり考慮に入れられていないようである。

彼の文学をめぐる座談会のような場では、そこでの出席者たち自身が、イギリスやフランスやドイツ文学を専攻した評論家や翻訳者たちであることが多いせいか、「吉田健一は日本文学に冷淡である」とか、「連歌という文学ジャンルについて、吉田健一は、ドナルド・キーンの日本文学論を翻訳して初めて知ったそうだ」ということがまことしやかに言われたりしているが、これらは一種の「文学者伝説」であろう。吉田自身はたとえ無意識であったとしても、彼の文学と日本の文学は深いところで通底しているのである。

2　隠遁の系譜としての『金沢』

『金沢』という作品の内容を簡単にまとめるのは難しい。一般的にはこのような作品は小説に分類されるのであろうが、その荒筋を辿るのは困難である。なぜなら、日付の順序に沿って話が進行する場合は荒筋も辿りやすいが、『金沢』の場合は、まるで容器に満たされた水が生き物のようにゆるやかにたゆたうがごとく、「永遠の現在」の情景が封じ込められているからである。あるいはまた、掌にすっぽりと納まるグラスの中の酒から、ゆるやかに立ち昇り周囲に拡がってゆく香気のような、と言ってもよいか。

吉田健一が没したのは昭和五二年の夏であるから、早いもので二十年近くなろうとしている。没後急速に忘れられてゆく文学者も多いことを考えれば、ここ数年来のブームとも言える再評価の潮流は、吉田文学のファンの一人としてうれしい限りである。現在、代表作が次々に文庫化されているし、雑誌の文学者特集では表紙の写真に吉田健一が使われたりもしている。また、全八巻別巻一巻の『吉田健一集成』(新潮社)も刊行された。読者が彼の作品や人間像に触れうる機会は、わたしが学生の時分に比べて、格段に多くなっている。

しかしその一方で、評論家や作家たちが描く吉田像には、小さな思い違いや文学者伝説の萌芽が見える。たとえば、吉田健一が英語に堪能であることを強調するあまり、子ども時代に愛読した『アンデルセン童話』も英訳本で読んでいたのではないか、というある文学者の発言には、驚かされた。なぜなら、吉田自身があちこちで長田幹彦訳の挿絵本だったと書いているからである。

つまりこのようなことは、吉田健一と言えば、すぐに英文学やフランス文学に通暁した文明批評家という固定観念が出来上がってしまっており、論者たちもそのレッテルの上で思考しているからなのだろう。そういった先入観や固定観念に捉われない精神の自由こそ、吉田文学の本質であるのに。

だから、吉田健一にまつわる先入観を抜きに『金沢』を読むならば、この作品こそは、隠遁文学の系譜に連なるものであろう。東京での日常生活を離れて、金沢で超俗的な時間を過ごす一人暮らしの主人公の生き方は、現代の隠者といってもよい。

『金沢』には、橋本関雪の掛物もモーツァルトの音楽も、フランスの庭園も、李白の詩も、インドの盆に載せられた唐の水差しも登場するが、その取り入れ方は、まるで鴨長明の『方丈記』のようだ。長明もまた自分自身が理想とする簡素な庵を理想の場所に設置して、経典を読誦し、琵琶や琴を演奏し、歌を詠む。インドに源を発する仏典、中国の白楽天の故事を思いながら奏でる楽曲、日本の和歌。当時の世界中の文明が取り入れられた閑雅な生活。そしてそのような生活の中での自由な思索の日々は、『金沢』の主人公の生き方へと、遥かな時空を越えて繋がっている。吉田健一もまた、日本文学の伝統の中に位置する文学者なのだ。

3　季節と文学

このように吉田文学を日本文学の流れの中に位置付ける捉え方は、決して最晩年に書かれた『金沢』にのみ当て嵌まるものではない。彼の三七歳の時の最初の書き下ろし『英国の文学』においてさえ、すでにそのことは現れている。たとえば文学と季節の密接な関わりに重点を置くのは、日本文学の特徴の一つと言ってよいだろう。わたしは、特にこの本の第一章「英国と英国人」が好きで、何回

繰り返して読んだかわからないほどである。その書き出しは次のような文章だ。

英国の文学が英国のものである以上、我々は先ずその文学を生じた英国と英国人について考えなければならない。英国は見方によっては、世界で最も醜くて住み難い国の一つであると言える。冬は長くて、その寒さは格別であり、真冬になれば小鳥は雀さえもどこかへ姿を消して、偶に飛び廻っているのがあれば、どこの水溜りも凍っているので、食物よりも先に水を欲しがるのである。そして緑のものは凡て地上から消え失せて、後には建築と舗装道路が残っているだけの鉱物の世界で寒さは雨を妨げず、雨は雪に変っていつまでも溶けないでいる。そうでなくてさえ日が短くて、午後四時にはもう暗くなる。

文学と風土の関連性自体は、事新しいわけではない。しかし、ここで描かれているような、英国の夏の甘やかさや秋の輝きや冬の厳しさは、余りにもリアリティがあったので、わたしがそれまでに多少は読んでいたシェイクスピアやディケンズの世界が、一瞬にして生気を注ぎ込まれたように感じられたのだった。詩や小説や戯曲よりももっと直接に心を豊かにし、外界を新鮮に見せてくれる文学評論の世界があることを、その時初めて知って感動した。

4　変化と持続

吉田健一の絶筆は「桜の木」という短篇であるが、この末尾のあたりで、次のような記述がある。

三上の庭に池はなかったが雀その他の鳥が水を飲みに来ることを考えて水盤に水を入れて庭に出してあった。こういう鳥は虫取りも結構してくれるのである。その水盤の水がその冬は毎朝凍っていた。それが表面だけでなくてどうかすると水が氷の塊になっていてこれは上から熱湯を掛けて氷が溶けるのを待つ他なかったからその冬は水盤に水を入れる時に熱湯を足す分を残して置く必要があった。これは戦後にそれまで確かになかったことで三上は庭に出て氷を割ったり熱湯を注いだりしながら一層その冬の寒さを感じた。

先ほど引用した最初の作品『英国の文学』の冒頭部と最後の短篇「桜の木」の末尾部分の見事な照応に、彼の文学形成の完成を見る思いがする。それはまるで、モーツァルトが八歳の時に作曲した最初の交響曲変ホ長調に現れるテーマが、最後の交響曲第四一番ジュピターで再び現われることとの不思議な共通項である。

吉田健一の文学者としての出発は、昭和一〇年二三歳の若さで翻訳した、エドガー・アラン・ポーの『覚書（マルジナリア）』であったから、六五歳で没するまで、四〇年余

りの時間が流れている。若い頃地下鉄の中である編集者に、「文学やって大丈夫でしょうか」と聞くほど思い詰めていた時期もあったという回想もあるが、変化しながら持続する彼の思考は、途絶えることなく静かに円環を閉じたのである。

5　わがアルカディア

吉田健一で忘れられないのは、「併し思えば、本が一冊出せたらどんなに嬉しいだろうと、そのことばかり考えていた時代もあった。」ということばである。わたしも書店に行くたびに、店頭に溢れる書籍を眺めながら、同じ事を思っていた時期があった。

その後、わたしにとっての最初の本『美しい時間』を出すことができたが、それは吉田健一論を含む文学・音楽・絵画論だった。一人の読者が著者になることへの遠い道のりと、それが達成された時の不思議な到達感を体験することができた。しかもこの拙著『美しい時間』は『吉田健一集成』の別巻に収められている「吉田健一年譜」平成二年の項に、「参考文献」として記載される幸運にも巡り合うことができたのだった。

今わたしの手元には、吉田健一の自筆はがきが一枚ある。夕暮の犀川を見た翌日、大友楼で昼食を摂りながら先代夫人大友美代さんから、いろいろ吉田健一にまつわる興味深いお話を伺う機会があった。吉田健一は酒席でもいつも決して膝を崩さなかったこと、加賀の名物治部煮は甘いので口に合わなかったこと、お城を案内したことなどを懐かしそうに語る夫人のことばには、吉田健一に対する尊敬の念が溢れていた。

そして帰り際に、夫人が帯の間から一枚のはがきを取り出して、わたしに下さったのが吉田健一のはがきだった。あまりにも思いがけないことだったし、貴重な自筆はがきを頂戴するわけにはいきませんと申し上げたが、どうぞ取っておいて、と親切に言われて、わたしはありがたく押し戴いた。それは、昭和三七年の年賀状で、先代のご主人宛のものだった。「謹賀新年　昭和三十七年元旦」と印刷された余白に、「二月に又お目に掛るのを楽しみに致してをります。」と自筆で書かれている。住所は印刷されているが、その後に「吉田健一」とこれも自筆で記されている。

以前に古書店の目録で偶然見つけて購入した垂水書房版『吉田健一著作集』全一六冊には、各巻毎に吉田健一のサインが書かれており、わたしの宝物であるが、不思議な縁で自筆はがきまで身近に置くことができたのは、望外の幸せであった。

『金沢』には、「繊細とは要するにそれに接していて何か温かなものを感じるということに尽きる」とある。このことばはそのまま吉田文学に当て嵌まるのではないだろうか。時節はまさに春。吉田健一の豊かで匂いやかな文学世界の扉をそっと開いては、「われもまたアルカディアにあり」と実感している。

（放送大学助教授）

■第13回日韓大学出版部合同セミナー・レポート

日・韓大学出版部活動の共通項

――実りある交流の前提を探る――

渡辺　勲
（東京大学出版会）

私たちの夏季研修会の場に、一年おきとはいえ大挙して現れる韓国大学出版部協会の代表団を、ただ漠然と眺めていた……、そんな私が多少の問題意識を持ち、日・韓大学出版部の交流の在り方についてあれこれと考え始めたのは、一九九三年夏季研修会以来のことである。率直に言って「こんな交流にどれほどの意味があるのか」がその出発点だった。交流の継続には、当然エネルギーが必要だ。無意味なら止めてしまった方がよい。だが多分自分はその意味を見つけきれていないのだろう、と思ってみた。今回の韓国での合同研修会に参加し、報告もしてみたいと願い出たのは、自分で納得できる「交流の意味」探しということにつきる。その結果は、と問われると返答に窮するが、私たちと同じように現場で頑張っている多くの大学出版人と友人になれたことは、ともかくも大きな成果であった。

以下の文章は、研修会での報告の全文である。あえて、いっさい手直しはしていない。韓国側の参加者のためにハングル訳の報告書を持参したことは言うまでもない。なお、セミナーの概略については、『大学出版』24（95冬）号（二四頁）に紹介記事があるのでご参照いただきたい。

ご紹介いただきました、東京大学出版会編集局長の渡辺勲です。私は、一九九四年度第13回日・韓大学出版部協会合同セミナーにおける日本側報告者の一人に選ばれたことを、大変名誉なことと思っております。実は私にとって貴国訪問は初めての体験です。学生時代に日本近代史を学び、東京大学出版会の編集者となってからも、専ら歴史学の分野で編集活動を続けてきましたので、貴国と日本との、古代以来の交流の歴史についても、豊臣秀吉の朝鮮半島侵攻が引き起こした癒し難い禍根についても、また日本帝国主義の貴国に対する恥ずべき侵略行為の数々についても、比較的正確に認識しているつもりです。それだけに、私は、皆様方の前でお話することに、かなり緊張しておりますが、またこのような歴史的背景を持つ両国だからこそ、実の伴った友好的な交流が極めて重要であることについても認識しているつもりです。これから述べます私の報告は、ある意味では、率直すぎるものの言い方になるかも

しれませんが、実り多い交流には、真剣で率直な対話こそが必要であるとの信念と、貴国に対する尊敬の念と皆様方への友情の思いが、私の報告の前提になっていることをご理解いただき、何卒お許し願いたいと思います。

さて、今回の合同セミナーの報告者に指名されましてから、私は、これまでに積み上げられてきたセミナーでのいくつもの報告を、記録が残っている限り全部、読み直してみました。そして、合同セミナーの歴史を整理してみました（表1参照）。

合同セミナーの歴史を振り返り、報告書の数々を読み直してみて感じたことは、率直に言って、「日・韓双方ともに基本的なことは語り尽くされている。この上さらに何を語ればよいのか。それにしては、交流の実が貧しいのではないか。」ということでした。そしてさらに、日・韓双方とも、大学出版部協会に結集している出版部の多様性、別の言い方をすれば、違いの大きさを感じました。それは、組織形態・規模、大学との関係の在り方から始まって、大学出版部の基本的活動であるはずの「学術出版」に対するスタンス、出版傾向、販売活動の形態と、際限なく広がっているようでもありました。これ程の違いがありながら、そもそも単一の大学出版部協会などに結集しても意味がないのではないか。またそのような事情を抱え込んだ二つの国の大学出版部協会が「交流」することなど、もともと無理なことで、ましてや実りある交流など画餅に過ぎないのではないか、という深刻な疑念が私の中に生じたのであります。

考えあぐねた結果、私は、私たちの中にある違いにばかりとらわれるのではなく、共通項にこそ注目しよう、という極めて平凡な結論に到達しました。しかしこの一見平凡で当たり前のような結論も、よくよく考えてみると、意外に奥が深いということが判ってきました。以下に述べることは、この平凡な結論の奥に、私が何を発見したか、という「発見物語」であります。

共通項1　私たちの組織は大学出版部である。

これ程に自明な共通項はありません。しかし、組織形態の多様性は考えないことにしても、「大学出版部とは何か、いかなる存在か、いかなる役割を担っているか」というように問いかけていくと、私たち全員で同じ認識を共有しているとは言えなくなるのではないでしょうか。つまり自明の共通項と思われることですら、実は共有しているとは言えない可能性があります。しかし、共通項を発見しなければなりません。

（1）大学出版部とは何か、いかなる存在か、いかなる役割を担っているか

大学は、高等教育機関であると同時に学術研究組織であり、社会に対する知的啓蒙機能を有しています。大学出版部は、大学のこのような性格・役割・機能に「出版機能をもって対応している出版組織です」。それゆえに、私たちの営みの産物は、教科書・学術書・啓蒙書となって表現さ

れるのです。

したがって、私たちの役割は、次のようにまとめることができます。

①教育課目ごとにすぐれた教科書を編集し出版すること。

②優秀な研究者を発掘し、高度な学術書を編集し出版すること。

③教育者・研究者としての大学人の社会に向かっての発言を、読みやすく判りやすい啓蒙書として編集し出版すること。

お断りしておきますが、このこと自体には何の発見もありません。既に全く同じことが、一九八九年の権義武先生

表1　日・韓大学出版部協会合同セミナー／略史

回	開催年月	開催	セミナーでの報告内容（その他）
1	1982.10.	韓国	（訪韓団長・中平千三郎，以下７名）
2	1983. 9.	日本	（韓国出版事情セミナー／朴承薫：建国大学出版部）
3	1984.10.	韓国	（訪韓団長・中平千三郎，以下７名）
4	1985. 9.	日本	「韓国における大学教材開発」林鐘哲：ソウル大学出版部
			「大学の教科書開発」関野利之：玉川大学出版部
5	1986.11.	韓国	（訪韓団長・石井和夫，以下６名）
6	1987. 9.	日本	「大学出版と環境」琴東信：檀国大学出版部
			「学術書の造本について」牧　祥平：牧製本印刷株式会社
7	1988.11.	韓国	（訪韓団長・山田　渉，以下６名）
			「中国との出版交流と対応」康寔鎮：釜山大学出版部
			「中国大学出版部協会との交流」山下　正：東京大学出版会
8	1989. 8.	日本	「大学出版部の現状と今後の方向」権義武：啓明大学出版部
			「大学出版部協会の現状と課題」関野利之：玉川大学出版部
9	1990.10.	韓国	（訪韓団長・加藤千曼樹，以下３名）
			「2000年代の大学出版」李光来：江原大学出版部
			「大学出版部の課題と展望」田中　浩：中央大学出版部
10	1991. 8.	日本	「韓日中，大学出版部の交流と協力方案」李光来：江原大学出版部
			「大学出版部の役割」山下　正：東京大学出版会
11	1992.11.	韓国	（訪韓団長・小谷昭夫，以下４名）
			「韓国における大学出版の現況と課題」車培根：ソウル大学出版部
			「ボーダレス時代における学術専門書」三浦義博：東海大学出版会
12	1993. 8.	日本	「韓日大学出版部協会の協力と展望」金相培：檀国大学出版部
			「大学出版部の現状と展望」朝武清実：東京電機大学出版局

の報告でも九二年の車培根先生の報告でも語られています。問題は、この常識的な「大学出版部の役割」（私たちの大切な共通項です）についての認識の深度と具体化の水準だと思いますが、次には、このような私たちの役割を果たすための前提条件について考えてみます。

（2）「大学」を研究すること、そして「大学」を再発見すること

私たちが属している大学と大学人のことをよく知るということです。つまり、どんな教育がどんな教授によって行われているか。受講している学生数はどれ位か、講義の評判はどうか。どんな研究者がどんな研究をしているか、学界における位置、役割、評価などはどうか。社会にインパクトを与えるような発言を続けている研究者は誰か、その影響力はどの程度なのか、などについて日常的に関心を持ちつづけることです。

さらに、大学自体はどのような方向に向かって変化しようとしているかを調べ、文教政策の歴史的解明から変化の方向を先取り的につかみ取り、そして、これらの知識を、私たちの編集方針に取り込んで、今どのような教科書が求められているか、今どのような学術書が学界の共有財産たりうるのか、今どのような啓蒙書が大学人の発言として社会に求められているのか、というテーマに置き換えて「出版企画」として具体化していくことが、私たちの基本的な活動になるはずであります。このような活動を通じて、私たちは改めて私たちの大学を認識し、発見することになります。

ここで若干ですが、東京大学出版会の例を紹介しましょう。東京大学では、文部省による大学設置基準の改訂、大綱化を受けて、大きな改革の波が起こり、今も激しく改革が進行しているところです。改革の基本は、学部教育の改革と大学院大学化、そして教養学部（前期課程）教育におけるカリキュラム改革、といってよいと思います。このことによって、私たちの出版の現場にも大きな変化が生まれつつありますが、とりわけ教養学部前期課程の英語教育の改革から生まれた二冊の教科書（一年生用『The Expanding Univers of English』、二年生用『The Univers of English』）、および従来の学問の枠組みから自由になって新設された基礎演習・基礎実験に対応する教科書としての『知の技法』、『基礎実験』などの新しいタイプの教科書は、ただ単に大学内の教科書としてだけではなく、広く社会にも受け入れられ、予想をはるかに超える部数が発行される結果となっております。

また、大学院大学化の方向に添って生み出されている学位論文の中から、特に優れた業績を、学術書を中心にしている商業出版社に先んじて刊行に踏み切り、採算の点でもなんとかやっていけるような結果を作り出しております。あるいは、大学内で行われる市民参加のシンポジュムや講演会の内容をよくよく編集し、啓蒙書として出版することで、高い評価を得た本も少なくありません。

これらのことは、私たち出版人が、大学に密着しながら

大学と大学人の営みに敏感であって、それらの変化に正確に対応できた結果であると考えております。私が言いたいことは、大学は、私たち出版人にとって、単なる仕事場ではなくて、宝の山であり宝の倉であるということです。だからこそ、大学を研究し大学を再発見することが、私たちの活動の原点ともなり、私たちの共通項になるはずだし、その共通項の相互の確認が、交流の前提にもなると思うのです。

私はここで無造作に、大学人とか「私たち出版人」とかいう言い方をしましたが、次の問題は、「大学を研究し大学を再発見する主体」についてであります。

共通項2　私たちは出版人である。

（3）　大学出版部の大学からの自立、大学人と出版人の役割

大学出版部の組織の在り方を云々するつもりはありません。大学諸機構の一部であろうと大学から組織的に自立していようと、関係ありません。大学を研究し大学を再発見するためには、大学を対象化・客観化できる視点が必要です。それは、実は大学自体、大学人自体には出来ないことではないでしょうか。いやたとえ出来たとしても、それは出版を目的として組織された大学出版部のそれとはその内容が違うはずです。違うからこそ意味があるのです。私は、大学を研究し大学を再発見する主体は、出版人でなければならないと思うし、とりわけ、編集者がその中心の担い手とならなければならないと思います。

私たちの東京大学出版会は財団法人で、大学からは相対的に自立しておりますが、会長は大学総長ですし、理事長以下の理事は、山下専務理事と私（常務理事）を除くと全員、東京大学の教授です。しかし、東京大学出版会の主体は、私たち二人の現場の理事と職員（合計六四名）にあります。大学教授である理事の先生は、企画の内容や大学の現状について指導的で適切なアドバイスはされますが、東京大学出版会の運営は、全て私たちに任されており、口を挟むことはされません。大学人は大学人としての役割があり、出版人には出版人の役割があり、両者は緊密に結び付いていながら、しかしはっきりと違う役割であるという相互認識の上に、東京大学出版会が存在しているからです。このことは、多少のニュアンスの違いはあっても、日本の大学出版部では常識であります。

もっと具体的に申しますと、大学出版部に関わってくださっている大学教授の第一の役割は、自らの出版部のために優れた本を書いてくださることであって、大学出版部の運営に口を出すことではありません。逆の言い方をすれば、出版の現場を預かる出版人は、大学出版部の運営にそれ位の覚悟でのぞみ、運営に失敗すれば、当然、責任をとらなくてはならないのです。

こういうことも言えます。編集者の仕事の第一は、本の企画の質を見極めることであって、大学教授の使い走りをすることではない、ということです。そのためには、編集

者は必要な知識の習得に熱心でなければならないし、「本」をめぐっては、大学教授と編集者は対等であって、役割が違うだけなのだという自覚と自負が求められるのです。たとえ世間で一流と言われる教授の仕事でも、編集者の出版を通した眼力で、拒否することも当然起こってくると思われます。

今回の合同セミナーの日本側代表団は、全員、出版の現場で責任ある立場の人間です。大学教授は一人もおりません。このことは私たちが、大学出版部は、以上に述べたような意味で大学から自立することによって初めて、大学出版部らしい活動ができると確信していることの表明でもあります。このことが、日・韓の共通項となるのかどうかご検討いただきたいと思います。

共通項3　大学出版部活動は永続的な出版活動である。

（4）　永続性、継承性を保証するのは人間、ということ

出版活動というのは息の長いものです。大学が潰れてしまったらその大学出版部がどうなってしまうのか、私には分かりませんが、その出版部で生み出された本は、優れたものであれば、無くなってしまうことはないでしょう。そのような価値を私たちは生み出しているのです。そしてこの活動を支えているのが、現場の編集者であり、営業マンであり、製作者（印刷機能の担い手ではない）であるのです。それぞれにかなりの技量が必要です。素人では出来ない仕事です。つまり出版のプロ集団なのです。それは出版経営についても同じです。出版人であって、出版のプロだからこそ、出版経営ができるのです。銀行屋さんをいきなり出版の経営責任者などには出来ないのです。このような出版の担い手は、高度な技量を蓄積するためにも、現場に長期間定着しなければなりません。そしてそのような人間によって、出版の永続性と継承性が保たれていくのです。したがって、出版部の職員が大学の職員である場合でも、このような専門性に配慮した人事が望ましく、出版部を希望する職員を系統的に育成し定着させるという観点がどうしても必要になります。

（5）　永続性、継承性を保証するのは企画ということ

出版活動の中心は、企画活動です。現場の編集者が、どこからか押し付けられたと感じるような企画は、原則として全部断りましょう。

優れた本、そしてしばしば評判のよい、よく売れる本は、編集者の企画能力と立派な本作り（製作）能力の結果です。編集者が駄目だと思うような企画を受け入れていたら、優れた企画は生まれにくくなります。優れた企画は、選び取るという編集者の主体的な判断を前提にしています。また、そのような判断の出来る編集者になるために、私たちは努力しなければならないのです。

（6）　永続性、継承性を保証するのは「金」、ということ

出版活動は金食い活動です。資金無くして優れた出版活動は出来ません。私たち東京大学出版会の出発点の資金の一部は、東京大学教官からの寄付によっています。以来44

年間、営々として活動を続けてまいりましたが、しばしば資金面で危機に陥ったこともありました。その都度、大学出版部としての活動の基本に立ち返りながら、寄付を募ったり、学術書に対する刊行助成金の獲得に走ったりいたしましたが、今考えるとやはり、ここまでやってこられたのは、良質な仕事に徹しつづけてきたことだと思います。大学と学界と読者のなかに、本に対する信頼度を、ひいては大学出版部に対する信頼度を、高め、定着させることができたことが、出版活動の継続を可能にしてきたと思います。このことは、別の言い方をすると、大学と学界と読者のなかに、きちんと本を届ける機能、営業活動の水準を向上させてきた、ということでもあります。

私たちの組織は、印刷機能を抱え込んでいません。日本では、ほとんど完全といっていいと思いますが、出版と印刷は分離しています。理由ははっきりしています。印刷は設備投資に金がかかります。いったん投資した金を回収し利益を上げるためには、出来るだけ効率的に機械を動かし続けることが必要です。そのためには印刷するものを獲得しなければならない。機械を働かせるのは確かに人間ですが、にもかかわらず印刷にとって肝腎なことは、機械を効率よく動かし続けることです。したがって極言すると、印刷にとっては何を刷るかはどうでもよいことになるのです。何を刷るかではなくてどれだけの量を刷るかが利益の源泉になるのです。しかし出版は、とりわけ学術書を中心にする大学出版部は、そこがまったく違います。まさに何を刷るかが問題です。その中身を作るのが、出版の仕事です。機械中心の印刷部門と人間中心の出版部門とが、一つの組織に同居するためには、両部門が二つの企業のように、原則的な内部取引・独立採算制に転換する以外にはないのではないでしょうか。印刷部門が利益を上げてくれるからなんとか出版活動が続けられる、というようなことがもしあるとすれば、それは大学出版部の在り方として根本的に間違っているし、またそれは、出版人の甘えの表現か、出版人の不勉強の結果か、どちらかだと思います。

したがって、出版活動で得た「金」（この中には刊行のための補助金・助成金も含まれます）だけで出版活動を維持・継続するにはどうしたらよいか、つまり営業活動の水準を向上させるにはどうするか、この課題こそが、私たちの共通項だと思います。

共通項4　大学出版部こそ、学術出版の世界で中心的存在になるべきである。

（7）大学出版部という優位性を生かしきる、ということ

日・韓両国とも、大学出版部の活動の成果（出版点数）が、それぞれの国の出版業界全体に占める比率は、一・五％程度であることを知りました（車先生の報告「韓国における大学出版の現況と課題」および山下正「ＡＡＵＰ総会に参加して」『大学出版』94秋号）。ちなみに、アメリカは二〇％を超えています。では、私たちはアメリカ大学出

表２　対韓国，翻訳出版権譲渡契約の一覧

出版社名	書　　名
高麗苑	『中国の千年王国』
玄音社	『近代日韓関係史研究』
〃	『中国仏教史』１，２，３
トンナム出版社	『中国医学思想史』
清文閣	『新編海岸工学』
比峰出版社	『ガットと日本農業』
大永文化社	『現代政治学叢書15　地方自治』
汎文社	『地球物理概論』
教学社	『神経回路網モデルとコネクショニズム』
NANAM 出版社	『現代政治学叢書１　国家と社会』
友進出版社	『SAS による実験データの解析』
法曹閣	『従属の政治経済学　メキシコ』
図書出版 HAN-UL	『講座国際政治』　1
釜山大学校出版部	『企業会計』
梨花大学出版部	『神経と化学伝達』

版部活動に学ぶべきでしょうか。確かに、まだまだ学ぶべきことは少なくありません。しかし当のアメリカ大学出版部の多くは、学術書の出版については展望を失いかけており、電子出版の領域に活路を見出そうとしているようです。ＡＡＵＰ総会に参加した山下は、このような現況を前にして、次のように述べています。

「アメリカの大学出版部は学術書の刊行を業務の中心にしてきたが、経済的には政府その他の補助金や寄付金を頼りに、また販売面では図書館を頼りに出版活動を行ってきた。（今アメリカの大学出版部に必要なことは）これらへの依存を極力排除し、自立した組織体としての基盤づくりを目指すことが不可欠ではないか。そのためには、教科書・教材や教養書・一般書を刊行して経済的基盤を自力で確保する努力が必要である。…同時に、『学術書は売れない』という前提ではなく、魅力ある学術書は研究者だけでなくその周辺の読者をも獲得できるのは確実で、もっと『売れる学術書』づくりに執着することこそが重要ではないのだろうか。」

私も全く同じ意見です。私たちの活動には、もはやストレートにお手本になるような先輩はいないのです。私たち自身が、苦労して苦労して、進んでいく道を見つけるしかないのです。そのためには、私たちが大学出版部であって一般の商業出版社ではないというところから与えられているはずの優位性を生かしきることです。そして、量的にはともかくとしても、質の点では出版業界の中心である、という存在にならねばならないのです。この目標は、私たちの共通項だと思います。

以上、私たちの共通項をめぐって長々とお話ししてきましたが、最後に、最近、私たち東京大学出版会が経験した、貴国からの翻訳権交渉の概略について述べておきます。

①『知の技法』をめぐって

この本については先ほど紹介しました。東京大学教養学部の教科書でありながら、現在三十万部も売れている本です。四月に刊行して評判になり始めてから、貴国の出版社からの翻訳権の交渉が相次ぎました。十数社に及んだた

め、翻訳権交渉は代理店の手を借りねばならなくなりました。残念ながら、韓国大学出版部協会加盟出版部からの問い合わせはありませんでした。

②『Tne Univers of English』と『The Expanding Univers of English』をめぐって

これも先ほど紹介しましたが、英語のテキストです。それぞれ六万部、三万部と売れているのですが、すぐに貴国のある商業出版社から交渉が舞い込みました。

これらの本は、大学出版部ならではの出版物です。いずれもかなり良い条件で交渉は進行中ですが、貴大学出版部には、このような翻訳には関心をお持ちでないのかと思い、少し残念な気がいたしました。

なおご参考までに、最近、東京大学出版会と翻訳権売買の成立した、貴国の出版社とその書名を紹介しておきます（表2参照）。

ご清聴ありがとうございました。

予想されたこととは言え、この報告は、出版部長の肩書きを持つ大学教授陣には評判が悪く、現場の出版人には極めて好評であった。「日頃言いたくても言えないことを、よくぞ言ってくれた」と何人もの韓国の仲間から声を掛けられ、私は嬉しかった。

それにしても、『大学出版』の貴重な誌面をこれ程に割いてまで掲載するような報告であったのかどうか、内心忸怩（じくじ）たるものもあるが、何卒ご容赦いただきたい。

第16回（一九九四年度）日本生命財団出版助成図書
刊行期間　平成七年四月～平成八年三月

①地球の成立―その地質発達史―　東海大学出版会
舟橋三男著（元北海道大学教授）

②史料・太平洋戦争被害報告　東京大学出版会
中村隆英他編（東洋英和女子学院大学教授）

③放射性廃棄物と地質科学　東京大学出版会
―地層処分の現状と課題―
新藤静夫他編（千葉大学理学部教授）

④江戸時代の職人尽彫物絵の比較研究　東京電機大学出版局
―長崎市松之森神社所蔵―
小山田了三他著（山梨学院大学教授）

⑤南東貝文化の研究―貝の道の考古学―　法政大学出版局
木下尚子著（梅光女学院大学助教授）

⑥大気水圏科学からみた地球温暖化　名古屋大学出版会
半田暢彦編（名古屋大学大気水圏科学研究所所長）

⑦鮭の川―川辺の環境民俗学―　名古屋大学出版会
出口晶子著（関西外国語大学専任講師）

⑧近代市制と都市名望家　大阪大学出版会
―大阪市を事例とする考察―
山中永之佑著（追手門学院大学教授）

⑨明治期紡績関係史料　九州大学出版会
岡本幸雄編著（西南学院大学商学部教授）

⑩ＹＵＳＨＯ A Human Disaster by PCBs and Related Compounds　九州大学出版会
倉恒匡徳他著（九州大学名誉教授）

＊日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

大学出版部ニュース

大学出版部協会年末例会にて

▼リーフレット・コンテスト結果
大学出版部協会では、大学出版部の理念と目的、活動を各大学の内外の方々に一層広く理解していただくためのリーフレットの原稿をコンテスト形式で公募しておりましたが、締切りまでに六点の応募がありました。いずれも水準の高い作品でしたが、厳正かつ慎重な審査の結果、秋田公士氏(法政大学出版局)の作品が入選と決まりました。同作品は、編集部会でさらに検討を加え近い将来、ブックフェアの会場などで配布される予定です。

▼大学出版部協会年末例会
十二月九日(金)夕五時三〇分から銀座のレストラン・高松に於て、年末例会が催されました。当日は、協会の初代幹事長を務められた箕輪成男顧問も出席されました。同氏は、スピーチのなかで最近のご自分の研究――東南アジアにおける出版事情の調査・分析――を紹介しながら、大学出版部の担うべき役割の益々大きいことを強調されました。

▼出版五団体合同新年会
一月二十七日(金)夕六時から日本出版クラブ会館に於て、出版五団体(法経会、歴史書懇話会、大学出版部協会、国語・国文学出版会、人文会)による合同新年会が開かれ、大学出版部関係からは二十九名が出席しました。

▼大学出版部協会では、新年度も更なる発展を期して、各種の活動を計画しております。ご期待ください。

北海道大学図書刊行会

▼浅田英祺著『流水の科学者 岡崎文吉』(菊判・一三三九〇円)が河川研究者や技術者の間で好評である。岡崎は、自然としての河川との共生のあり方を生涯を通じて実践的に追求した先駆的思想家＝技術者であり、また石狩川治水の祖としても、一部の河川工学関係者の間では高く評価されてきた。これまで河川の直線化とコンクリート化を推し進めてきた土木界が、開発と環境の調和を模索し、治水方法を根本から見直さざるを得なくなった昨今、歴史の奥深く忘れ去られていた岡崎の思想と業績が現代に鮮やかに蘇りつつある。彼の「自然主義の治水」思想は、千歳川放水路を始め、いま全国で問われている河川のあり方を巡る問題に重要な指針を与えてくれそうである。没後五〇年にして初の本格的評伝。

聖学院大学出版会

▼濱田辰雄著『神道学者・折口信夫とキリスト教』(A5判上製 定価三三〇〇円)

▼日本の伝統的宗教である神道を、太平洋戦争敗戦後、キリスト教をモデルとして大胆な構造改革を試みた折口信夫。この折口の思想構造を明かにし、あまり知られていない折口とキリスト教の関わりを紹介します。また折口の『戦後神道論』を詳しく論じながら、日本の宗教的・精神的伝統を、世界を視野に入れた普遍的価値との折衝の中で、新しい伝統へと生まれ変わらせようとした折口の姿勢に著者は注目します。

▼この孤立無援に見える姿勢こそ、国際化の進む現代日本と日本人の精神的課題ではないかとするユニークな折口論です。ちなみに著者は、牧師(大学講師でもありますが)です。

慶應通信

▼『刑事法講義ノート』園田寿・荒川雅行・井田良著（二五〇〇円）三一〇頁の本文の中に刑法総論・各論、刑事訴訟法を集約的に収録しており、刑事法についての必要事項・学説が的確に記載されて、知識の整理、制度への理解に役立つと同時に、刑事法全体への思考も可能となるように記述されている新しい形の参考書であり、授業の機能的な補助教材の役割も果たすものである。

▼『破産法研究』宗田親彦著（五二〇〇円）第一線の弁護士であり研究者である著者による理論と実践を統合した最新の論文集が刊行された。本書は破産法の今日的重要課題を、否認、担保、契約、免責、倒産法の諸問題に分類して検討し、達意の文章で論述している。実務家、研究者におすすめしたい。

産能大学出版部

▼はたして中国は二一世紀の経済超大国となりえるか。N・R・ラーディ著『爆発する中国市場経済の実態』（古澤徳明訳・二〇〇〇円）は中国経済専門家であるアメリカ人の著者が、国際貿易における香港の役割、外国資本による投資問題、ガット加盟問題、大幅な対米黒字問題等をグローバルな観点でとらえ、二一世紀の国際資本市場における中国の役割、問題点を指摘し、検証した書である。

▼『ビジネス英語　読み書きの基本』（藤田榮一著・二〇〇〇円）は読み物形式になっており、通勤電車の中でも手軽に読める構成になっている。国際情報を的確に取り入れるための英字新聞の読み方、ビジネス文書の書き方等が、豊富な事例により、平易に理解しやすく解説されている。

玉川大学出版部

▼このたび、創立40周年を迎えたＩＤＥ（民主教育協会）の機関誌『ＩＤＥ・現代の高等教育』誌に掲載された多数の論稿より精選・編集し、シリーズ「現代の高等教育」（全4巻・各二四七二円、揃い定価九八八八円）を刊行した▼全4巻共通のテーマは「大学の変革に向けて」。(1)舘昭編『転換する大学政策』(2)苅谷剛彦編『キャンパスは変わる』(3)金子元久編『近未来の大学像』(4)天城勲著『大学の変革―内と外―』▼諸問題を抱える大学改革、来るべき二一世紀の大学像を模索する。

中央大学出版部

▼中央大学経済研究所編『環境の変化と会計情報―ミクロ会計とマクロ会計の連環』（二八八四円）経済・社会・国際環境の変化および地球環境保全の問題が広義の会計領域全般にわたり新しい問題を生起させ、これらが会計情報に及ぼした影響、またこれらの問題に会計がどう反応し取り組むべきかを追究する。

▼矢島悦太郎著『社会政策理論の根本問題』（七二一〇円）

日本的労使関係や日本的経営がその「特質」としてもつ諸秩序「年功序列制」「終身雇用制」さらには労働組合の「企業別組織」などを対象に、ヘーゲルとマルクスの科学方法論に従い、すべての実在する現象を考察するに際しては、常にそれらが生じた必然性を究明してきた著者が、前二著につづいて現在の学界の通説を鋭く批判する〔第三巻〕。

東海大学出版会

▼プレンティスホール音楽史シリーズ全8巻の最終配本『②ルネサンスの音楽』が刊行になりました。（定価六六九五円）

第1回配本から二十五年！ぶりに、全二八二〇ページの本シリーズが完結したことは、わが国の音楽史研究・音楽教育に寄与すること少なくないと信じます。ぜひ一度ご高覧ください。

東京大学出版会

▼コンピュータの発達に伴って進展する学問分野は多岐にわたるが、とりわけ流体力学は、〝数値解析〟という新しい手法の出現によって著しく進歩した。

二月から刊行を開始した「数値流体力学シリーズ」は、日本の第一線で活躍している各分野の第一人者を執筆陣に迎えて、数値流体力学の取り扱う全領域を初めて体系化したものである。

入門的基礎知識から、先端科学技術分野への応用までを、CGを駆使してわかり易く解説した。

1 非圧縮性流体解析（2月刊）
2 圧縮性流体解析（5月刊）
3 乱流解析（7月刊）
4 移動境界流れ解析（3月刊）
5 燃焼・希薄流・混相流・電磁流体の解析（6月刊）
6 格子形成法とコンピュータグラフィックス（4月刊）

A5判・価三九一四円～

大学出版部ニュース

東京電機大学出版局

▼出版においてCTSの果たした役割は大きいが、理工系著者が多く用い始めたTeX（テフ）やCD-ROMの影響は、編集にとってそれ以上と思える。過渡期のせいもあり、従来の編集ルールどおりともいかず、印刷会社と打ち合わせながらとなる。

▼榊原進著『ウェーヴレットビギナーズガイド（CD-ROM付）』（A5・予価四一二〇円）

三月三〇日日本機械学会大会までに間に合わせて刊行。今や書籍の付録にCD-ROMが付くようになった。小局が五年前、業界に先駆けてCD-ROM出版をした価格が約十万円。直接の比較はできないが、隔世の感ありである。TeXの原稿とCD-ROMに収めるプログラム・画像データ・文字データすべての脱稿予定日が三月十五日。間にあったら拍手喝采である。

東京農業大学出版会

▼『野菜栽培あれこれ』（定価一五〇〇円）　米安　晟著

生きているということが本当に分るということは、豊かな経験と深い愛情ではないでしょうか。これは別に人間のことを言っているわけではありません。

植物は、確かに動けない。しかし動いていないわけではないのです。刻々と変化し、季節を敏感に感じとっているのです。寒い時には〝寒い〟と、暑い時には〝暑い〟と表現します。野菜をつくるには、野菜の特性を知ることです。トマトとナスでは、同じナス科でもやはり特性が違います。

著者は、約五十年間野菜作りと研究に専念してきました。だから学生は著者を「麦わら帽子」と言います。その豊富な経験と植物への深い愛情をまとめました。

東京理科大学出版会

▼明日をひらく科学教養誌――『SUT BULLETIN』

▼11月号は「センサ」を特集。センサという言葉は一般化しても、個々のセンサの原理や、その利用状況はあまり知られていない。そのセンサ技術を取り上げ平易に解説している。▼12月号の特集は「ゆらぎと快適感」。生体リズムのゆらぎと同じ性質を持つ刺激を受けると、生体は快適に感じるらしい。音楽の感性工学的アプローチを試みた研究報告「音楽療法からアメニティ向上へ」はまさに快適!?

法政大学出版局

▼『ピエール・ベール著作集』全八巻（既刊一～七）の訳者である野沢協氏が、本著作集の訳業によって小西国際交流財団の第二回日仏翻訳文学賞を受賞、二月二七日、授賞式が開催された。なお、本賞の選考は、日本側が大岡信、大江健三郎、清水徹、石井晴一の四氏、フランス側がミッシェル・トゥルニエ、フランシーヌ・エライユ、ジャン＝ジャック・オリガス、ジャン＝ジャック・チュディンの四氏によって行なわれた。

ピエール・ベール著作集全八巻

1	彗星雑考	12,360円
2	寛容論集	15,450円
3	歴史批評辞典Ⅰ	28,840円
4	歴史批評辞典Ⅱ	28,840円
5	歴史批評辞典Ⅲ	39,140円
6	続・彗星雑考	19,570円
7	後期論文集Ⅰ	39,140円
8	後期論文集Ⅱ	未刊

放送大学教育振興会

▼平成七年の新刊は七四点。重版は一〇二点。放送大学平成七年度の開設科目三〇二点のなかに含まれて、三月には学生の手元に届いた。

▼市販本の売れ行きも好調。新刊書では『高齢者福祉論』（小笠原祐次・山田知子）、『法学入門』（星野英一）、『現代の国際政治』（高橋和夫）、『国際社会学』（梶田孝道）、『情報工学〈三改訂〉』（都倉信樹）、『企業経済と情報・戦略』（黒澤一清）、『労使の関係』（桑原靖夫）、『世界の宗教』（阿部美哉）、『歴史考古学』（白石太一郎）などは、特に興味と関心を呼んでいる。

▼平成九年以降に「放送衛星BS4」の打ち上げが予定されている。放送大学の実質的内容をより高めるべく出版部・販売部とも、その態勢づくりと準備を開始した。

明星大学出版部

▼福島茂明著『社会科教育』

著者は、社会科教育とは何なのか、社会科という教材について社会科の成立した過程、発展目標、内容、方法、評価等を問いなおすことによって、社会科本来のねらいをしっかりと把握し、生き生きとした学習が出来ることによって、社会科本来の理想的な学習法を見出そうとしている。また、昭和22年から刊行された「学習指導要領社会科編」をはじめ、改訂された年度の学習指導要領を掲載、資料性をもたせた教科書となっている。

六月刊行予定の井関正昭著『日本の近代美術・入門1800－1990』は、日本美術における西洋リアリズムの刺激、明治初期の洋画日本画と彫刻における近代の展開等を内容とし、写真をふんだんに入れた図書として現在進行中。

早稲田大学出版部

▼エリザベス朝喜劇10選第Ⅱ期全10巻（大井邦雄監修）の刊行を開始しました。好評を得た第Ⅰ期に続き、シェイクスピアと同時代の喜劇作品を全篇本邦初訳で紹介します。第一回配本第二巻『マザー・ボムビー』（J・リリー／大井邦雄訳、二三〇〇円）

▼早大理工総研シリーズ②『東京の先端風景』（尾島俊雄、二〇〇〇円）は、ヒートアイランド現象、ごみ処理などの緊急課題に応え、ライフラインのあり方を考えます。①『地域冷暖房』（尾島俊雄、二〇〇〇円）と合せてのご購読をお薦めいたします。

名古屋大学出版会

▼福田眞人著『結核の文化史―近代日本における病のイメージ』（定価四六三五円）明治維新以降一千万人以上の犠牲者を出すという苛酷な現実の一方で『不如歸』に代表される小説等に描かれ、「上流」「天才」「美人」といった甘美なイメージを喚起した独特な病の、近代日本における文化的位相を解明する。

▼園田英弘・濱名篤・廣田照幸著『士族の歴史社会学的研究―武士の近代』（定価五六六五円）旧武士層にとって近代とは何だったのか？　士族層の複雑な軌跡を歴史社会学的に解明する。

▼山田賢著『移住民の秩序―清代四川地域社会史研究』（定価六一八〇円）人の移動を視軸に、「地域」の生成と変容を微視的に検討し、伝統中国の「秩序」を基層から照らし出した、気鋭による斬新な研究。

京都大学学術出版会

▼清瀬義三郎著"Japanese Grammar: A New Approach"（四二〇〇円）いわゆる国文法に、外国語や言語学に接するに及んで幾多の疑問に襲われた経験は誰しもが持つ。日本語の等音等拍の音節表現はかなり特殊的であるし、統辞論的・形態論的にみても、言語学の常識とは合わない。本書は、文法的諸機能が語形変化として示される屈折言語と対称的な、語幹に文法的諸機能を担う接（尾）辞が膠（にかわ）のように連接して語を形成していく、アルタイ諸語と共通した日本語の形態論的性格から、またその正当性を古代日本語から照射しつつ、日本文法全体―その中核である「動詞の活用」は否定される―を読解・再構成した、著者の三十余年にわたる英語圏での、ウラル・アルタイ語研究に裏づけられた、貴重な提言である。

大阪経済法科大学出版部

▼東郷久著『戦後日本の公共投資』（予価一二六六円）

一月一七日五時四六分、いまだかつて経験したことのない振動に跳び起きた私は、やがて停電から解放されたTVの映像から流れる生まれ育った街の崩壊に言葉を失った。翌日、被災現場に足を踏み入れても、現時点においても、それがどういう事態なのか、未だにうまく言い表せない。

ただ、経済性重視の都市計画や防災対策のあり方、ひいては行政機構そのものにいたるまで、これまで日本の発展を支えて来た光の裏側―巨大な闇部が立ち現れてきたことはたしかである。そういうタイミングに本書は、生産基盤整備としての公共投資にスポットをあてるという、日本の光跡を分析しつつその問題点をえぐり出す。

関西大学出版部

▼高森八四郎著『示談と損害賠償』（定価五〇〇〇円）わが国では争いが示談により解決されることが多い。示談は民法上和解であり、これは「互譲」により争いを止める契約である。本書は、和解と示談をめぐる法律問題を和解の歴史や理論を深く考察し多面的に究明する。交通事故をめぐる示談の効力等、興味深いテーマを明快に論じる。

▼和田葉子編著『'Temptations' from Ancrene Wisse vol. 1』（定価五〇〇〇円）世界で初めて Ancrene Wisse 全体の四割以上を占める第四章すべてに句読点を施し編纂。各センテンスには通し番号と現代英語の対訳がつく。英文学史上、いち早く七つの大罪を動物にたとえ、人間の煩悩を絵画的に描く文学的価値の高いこの「誘惑の章」は中世英文学研究者必携の書。

九州大学出版会

▼西日本地区の学術書出版会として昭和五十年三月に創設され、今年で二十周年を迎える。この間、各大学における研究成果を上梓し、広く学界並びに地域の文化の発展に寄与してきた。

▼発足以来約四〇〇点、特に近年は年間三十数点を精力的に刊行。今後も埋もれた研究成果を世に問い、普及を図りたい。

加盟校

九州大学
九州芸術工科大学
福岡教育大学
九州工業大学
佐賀大学
佐賀医科大学
長崎大学
熊本大学
大分大学
大分医科大学
宮崎大学
宮崎医科大学
鹿児島大学
琉球大学
山口大学
福岡女子大学
北九州大学
熊本県立大学
下関市立大学
福岡大学
九州産業大学
西南学院大学
中村学園大学
福岡歯科大学
久留米大学
九州国際大学
産業医科大学
熊本学園大学
梅光女学院大学

大学出版部ニュース

流通経済大学出版会

流通経済大学は、今年が丁度創立三十周年にあたっている。このことを慶祝する一環として、「創立三十周年記念論文集」を刊行することとなり、今年後半の発刊に向けて準備を進めている。今回の記念論文集には、現代社会の諸問題を学際的な立場から、多角的に研究した成果を主として集めたものであり、執筆者は約五十名となっている。内容は、経済・経営・法律・社会・教育など社会科学と人文科学の両分野にわたっている。掲載量の関係から、経済学部と社会学部の学部別に、二分冊として刊行する予定である。

大阪大学出版会

〈1月17日〉では初校・再校を併せて約二千頁が進行中。もし未だ活版の時代であれば、当然その分の組版は全部崩れ……と顔面蒼白になるところ。

お見舞いに感謝いたします。

▼身近にありながらこの半世紀のあいだ減少していない病気が食中毒。その理由の一つに、大学でなされた研究成果が社会に正しく普及していないことがあげられる。そこで誕生したのが本田武司　著『食中毒学入門』（最新刊）。著者は阪大微生物病研究所の教授であるが、阪神大震災の被災地や関西新空港での検疫・防疫にも大活躍。

▼本年は、ルイ・パストゥール没後百年に当たる。近代科学・医学の礎を築いた偉業を記念し『ビールの研究』（一八七六刊）の翻訳を進行中。今春五月刊。

▼図書目録出来！　送呈します。

新刊案内 '95・1～'95・3

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会
日本巨大企業の行動様式―一九八〇年代の所有と支配　汪　志平　三六〇五円
Japanese-German Review of Perinatal Medicine　鈴木重統・武田佳彦・E. Saling・J. Dudenhausen 編　一〇三〇〇円
電極触媒の科学　喜多英明編著　七七二五円
積雪寒冷型アトリウムの計画と設計　絵内正道編著　一八五四〇円
Evolution of Circadian Clock　広重力・本間研一編　二〇六〇〇円
北東アジア古代文化の研究　菊池　俊彦　八九六一円
環境行政判例の総合的研究　畠山武道・木佐茂男・古城　誠編著　六三八六円
農産物価格政策と北海道畑作　玉井時久・伊藤　繁・澤田　学編著　四七三八円
ドイツ社会民主党日常活動史　山本　佐門　六五九二円
北海道農村住宅変貌史の研究　足達富士夫編著　六九〇一円
図説　社会性カリバチの生態と進化　松浦　誠　二〇六〇〇円

■聖学院大学出版会
社会改革への道五十年　金井信一郎　四八〇〇円
神道学者・折口信夫とキリスト教　濱田　辰雄　三三〇〇円

■慶應通信
オーストラリア社会問題入門　ヴィクター・J・カラン著／関根政美／関根　薫訳　三六〇〇円
卒業論文の足跡　慶應義塾大学通信教育部編　一〇〇〇円
正論自由第十一巻―ダマスカスへの道―　中村　勝範　一八〇〇円
破産法研究　宗田　親彦　五二〇〇円
点字学習指導の手引（改訂版）　文部省　一七九〇円
地球環境経済論〔下〕　慶應義塾大学経済学部環境プロジェクト編　二八〇〇円
開発の国際法　高島　忠義　四八〇〇円

■産能大学出版部
雇用崩壊と人事改革の時代　服部　光雄　二〇〇〇円
「どうしたらよいか」と悩んだときに読む本　国司　義彦　一五〇〇円
爆発する中国市場経済の実態　ニコラス・R・ラーディ／古澤徳明訳　二〇〇〇円
1-2-3販売会計　谷田　英男　二八〇〇円
頭がよくなるまじめな話　中山　正和　一五〇〇円
目標必達のリーダーシップ　水井　正明　一七〇〇円
小資本、素人でもできる店100業種　今村　清継　一五〇〇円
黒船を迎えた製造現場　西沢　隆二　二〇〇〇円
価格破壊時代の生販革新　辻　伸次　二〇〇〇円
ビジネス英語読み書きの基本　藤田　榮一　二〇〇〇円
新・自分を育てる言葉　小橋　邦彦　一八〇〇円
ベンチャー企業経営の時代　山川　晃治　一八〇〇円

■玉川大学出版部
立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ―　E・キンモンス／広田照幸訳者代表　和田　修二　四九四四円
教育する勇気　二一世紀の大学像―歴史的・国際的視点からの検討―　関　正夫　二八八四円
シュプランガーと現代の教育　村田　昇編　六一八〇円
シリーズ「現代の高等教育」
(1)転換する大学政策　館　昭編　二四七二円
(2)キャンパスは変わる　苅谷剛彦編　二四七二円
(3)近未来の大学像　金子元久編　二四七二円
(4)大学の変革―内と外―　天城　勲　二四七二円

■中央大学出版部
構造転換下のフランス自動車産業―管理方式の「ジャパナイゼーション」―　中央大学経済研究所編　二九八七円
環境の変化と会計情報―ミクロ会計とマクロ会計の連環―　中央大学経済研究所編　二八八四円
社会政策理論の根本問題〔第三巻〕　矢島　悦太郎　七二一〇円
社会思想史への道　田村　秀夫　三二九六円
国際私法・比較法論集　K・F・クロイツァー／山内惟介監訳　三六〇五円
中国法制史（下）　張　晋藩／真田芳憲監修　四〇一七円
批評理論とアメリカ文学　検証と読解　中央大学人文科学研究所編　二九八七円

■東海大学出版会
カント『判断力批判』の研究　中村　博雄　九二七〇円
地球を救う思想―続熊本発地球環境読本―　地球環境問題研究会編　三〇九〇円
BASIC入門　大薮多可志・飯田茂美・黒部利次　二三六九円
改訂版SPICEによる電子回路の基礎　小高明夫・佐藤邦夫　二四七二円
比較生殖学―生殖と性の生態学―　山岸　宏　三三九九円
北海道の地表性歩行虫類―その生物環境学的アプローチ―　木元新作・保田信紀　八六五二円
フォッサマグナ　山下　昇編著　四九四四円
雪と氷の世界　若濱　五郎　一八五四円
鉱物の科学〈新版地学教育講座③〉　地学団体研究会編　二五七五円
岩石と地下資源〈新版地学教育講座④〉　地学団体研究会編　二五七五円
日本列島のおいたち〈新版地学教育講座⑧〉　地学団体研究会編　二五七五円
地球の水圏―海洋と陸水〈新版地学教育講座⑩〉　地学団体研究会編　二五七五円
記号の力学〈記号学研究⑮〉　日本記号学会編　二八八四円
改訂版初級ロシア語　佐藤靖彦・高橋誠一郎・山川博　二〇六〇円
共存同衆の進展と影響　澤　大洋　三六〇五円

■東京大学出版会
自民党政権下の政治エリート―新制度論による日仏比較―　野中　尚人　五一五〇円
競争と管理の学校史―明治後期中学校教育の展開―　斉藤　利彦　七四一六円
象徴の美学　小田部胤久　八〇三四円
ルーマニア経済体制の研究―一九四四―一九八九―　上垣　彰　六七九八円

老化とホルモン〈UPバイオロジー95〉　川島誠一郎　一六四八円
日本の政治と選挙　三宅　一郎　二八八四円
日本経済と国際金融　石見　徹　四一二〇円
英国綿業衰退の構図　日高　千景　六一八〇円
ジェンダーの日本史（下）―主体と表現　仕事と生活―
脇田晴子・S・B・ハンレー編　八八五八円
アグリビジネスの産業組織　荏開津典生・樋口貞三編　六五九二円
生命からのメッセージ―細胞の誕生とその進化―　木下清一郎　二六七八円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇58　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇79・80　国立国会図書館所蔵　各一六四八〇円
枢密院会議議事録76・昭和篇34　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
東京問題の経済学　八田達夫・八代尚宏編　三九一四円
アメリカ経済の歴史―一四九二―一九九三年　秋元　英一　二八八四円
新版　大正デモクラシー論―吉野作造の時代―　三谷太一郎　五三五六円
現代日本外交の分析　草野　厚・梅本哲也編　七四一六円
非圧縮性流体解析―数値流体力学シリーズ1―　数値流体力学編集委員会編　四七三八円
確率表現関数〈UP応用数学選書14〉　森口　繁一　四〇一七円
TSPによる経済データの分析〔第2版〕　和合　肇・伴　金美　四三二六円
日本の戦時経済―計画と市場―　原　朗編　七七二五円
甲骨文字字釋総覧　松丸道雄・高嶋謙一編　四六三五〇円
モンゴル帝国史研究序説―イル汗国の中核部族―　志茂　碩敏　一七五一〇円
中国文化人類学文献解題　末成　道男編　九〇六四円
日本荘園絵図聚影一（上）東日本一　東京大学史料編纂所編　五六六五〇円
Chironomidae of Japan　佐々　学・菊池三穂子　一二三六〇円
枢密院会議議事録77・昭和篇35　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇59　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇81・82　国立国会図書館所蔵　各一六四八〇円
美学辞典　佐々木健一　三九一四円
通商条項と合衆国憲法　木南　敦　六七九八円
社会運動の中範囲理論〈社会学シリーズ〉　片桐　新自　三九一四円
財政学講義〔第2版〕　林　健久　二五七五円
ドイツ文学史〔第2版〕　藤本淳雄ほか　四三二六円
中世のムラ―景観は語りかける―　石井　進編　三七〇八円
日米関係通史　細谷千博編　二八八四円
新国際学―変容と秩序―　廣瀬和子・綿貫譲治編　三五〇二円
移動境界流れ解析〈数値流体力学シリーズ4〉　数値流体力学編集委員会編　三九一四円
コンピューティング科学　川合　慧　二四七二円
ミトコンドリア〔第2版〕〈UPバイオロジー2〉　中澤　透・浅見行一　一六四八円
沈み込み帯のマグマ学―全マントルダイナミクスに向けて―　巽　好幸　三二九六円
伝熱工学〈東京大学機械工学6〉　庄司　正弘　三二九六円
土壌物理環境測定法　中野政詩ほか　三九一四円
洗練と粗野―社会を律する価値―　清水　昭俊編　五三五六円
骨の動物誌　神谷　敏郎　二四七二円
The Postwar Japanese Economy (2nd ed.)

中村　隆英　三七〇八円
枢密院会議議事録78・昭和篇36　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇60
国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇83・84
国立国会図書館所蔵　各一六四八〇円

■東京電機大学出版局

プラクティスデジタル信号処理
Y・トーマス　中村　尚五　二五七五円
第4級ハム教室〈アマチュア無線技士国家試験〉
吉川　忠久　一六四八円
演習電気基礎（下）
電気基礎研究会　一〇三〇円
高校生のためのポケコン―カシオ版
諸房　岑他　九五〇円
熱力学の計算法〈計算法シリーズ〉
松村篤躬・越後雅夫　一七五一円
改訂量子物理学入門〈理工学講座〉
青野　朋義他　三三九九円
改訂制御工学（上）〈理工学講座〉
深海登世司・藤巻忠雄監修　二六七八円
初めて学ぶ基礎電子工学
小川　鑛一　二九八七円
たのしくできるやさしい電子ロボット工作
西田　和明　一五四五円
空気圧利用の基礎と応用〈わかりやすい機械教室〉
高橋　徹　二四七二円
つくる並列処理コンピュータ
小畑　正貴　二四七二円
設備工業製図〈文部省著作教科書〉
文部省　二四〇〇円
造園施工・管理〈文部省著作教科書〉
文部省　五三五円

■東京農業大学出版会

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

テクストのぶどう畑で
I・イリイチ／岡部佳世訳　二四七二円
細分化された世界〈迷宮の岐路Ⅲ〉
C・カストリアディス／宇京頼三訳　三五〇二円
フロイトを読む―探求と逍遥―
P・ゲイ／坂口明徳・大島由紀夫訳　三〇九〇円
一八四八年の女性群像
加藤　節子　四八四一円
観光のまなざし―現代社会におけるレジャーと旅行―
J・アーリ／加太宏邦訳　二九八七円
尾崎秀実伝〈改装版〉
風間道太郎　二九八七円
ユートピア的なもの
L・マラン／梶野吉郎訳　四三二六円
人格の成層論
E・ローターカー／北村晴朗監訳
大久保・石川・針生訳　二九八七円
人間本性論―第一巻　知性について―
D・ヒューム／木曾好能訳　一六四八〇円
征服の修辞学―ヨーロッパとカリブ海先住民、一四九二―一七九七年―
P・ヒューム／岩尾・正木・本橋訳　四九四四円
年貢を納めていた人々―西洋近世農民の暮し―〈新装版〉
坂井　洲二　二五七五円
古代エジプトの遊びとスポーツ
W・デッカー／津山拓也訳　二七八一円
同性愛の百年間―ギリシア的愛について―
D・M・ハルプリン／石塚浩司訳　三九一四円
祭礼文化史の研究
◎日本生命財団出版助成図書
福原　敏男　一二八七五円
図説・藁の文化

◎日本生命財団出版助成図書

神　罰　C・v・リンネ著／W・レペニース他編　小川さくえ訳　四八四一円

真の存在　G・スタイナー／工藤政司訳　二八八四円

フランスの自伝―自伝文学の主題と構造―　Ph・ルジュンヌ／小倉孝誠訳　三五〇二円

エデンの園の言語―アーリア人とセム人：摂理のカップル―　M・オランデール／浜崎設夫訳　三五〇二円

哲学〈45号〉―特集・宗教と哲学―　日本哲学会編　一八五四円

労働農民党6（日本社会運動史料・原資料篇）　法政大学大原社会問題研究所編　三三九九〇円

特別定価三〇九〇〇円／特価締切＝八月末日迄

■放送大学教育振興会（○印はビデオ・ソフト）

現代社会と教育　新井郁男・岡崎友典　一八五〇円

言葉と教育〈改訂版〉　福沢周亮　一七五〇円

道徳教育　木原孝博・武藤孝典　二六八〇円

メディアと教育　高乗康雄・遠藤　榮・白鳥元雄　二二七〇円

現代学校論　舘　昭　一七五〇円

国際化と教育　小林哲也　一七五〇円

現代社会の学力　駒林邦男　一七五〇円

教育評価　梶田叡一　二三七〇円

教育の歴史〈改訂版〉　石川松太郎編著　一七五〇円

教育の心理　吉田章宏　三〇九〇円

子どもの発達と社会・文化　三宅和夫編著　一七五〇円

臨床心理学　田畑　治編著　一七五〇円

子どもの発達とその障害―世界の子どもは、今―　山崎晃資編著　一七五〇円

西洋古代中世哲学史〈改訂版〉　クラウス・リーゼンフーバー　量　義治　二五八〇円

西洋近世哲学史　渡邊二郎　二〇六〇円

現代の思想的状況　二三三七〇円

世界の宗教　阿部美哉編著　二四七〇円

中世の日本文学―作家と作品―　久保田　淳・島内裕子編著　二〇六〇円

古典古代史　伊藤貞夫編著　二二七〇円

歴史考古学　白石太一郎編著　二五八〇円

生活構造の理論　清野きみ編著　二〇六〇円

家族過程論　正岡寛司　二三七〇円

ライフコース論　大久保孝治・嶋崎尚子　一七五〇円

着心地の追究　丹羽雅子・酒井豊子編著　二三七〇円

食生活の成立と展開　石川寛子編著　二〇六〇円

住まいの環境学　梅干野　晃編著　三三〇〇円

骨と関節の健康科学　青木虎吉編著　二三三七〇円

現代の精神保健　仙波純一・高橋祥友編著　二〇六〇円

高齢者福祉論　小笠原祐次・山田知子編著　二三三七〇円

地域福祉論　大橋謙策　一七五〇円

法学入門　星野英一　二〇六〇円

商法　濱田道代　二〇六〇円

労働法　山口浩一郎　一七五〇円

法の歴史と思想―法文化の根柢にあるもの―　石部雅亮・笹倉秀夫　二二七〇円

現代法の諸相　水野忠恒編著　一七五〇円

政治分析の手法　大嶽秀夫　一四四〇円

現代の国際政治〈三訂版〉　高橋和夫　二九九〇円

現代日本の政治と政策　新藤宗幸・山口二郎編著　一四四〇円

現代日本の地方自治　大森　彌　二一六〇円

財政学　貝塚啓明・宮島　洋　一四四〇円

金融論　貝塚啓明　一四四〇円
欧米経済史〈三訂版〉　関口尚志・梅津順一　二三七〇円
科学技術史　道家達將編著　三六一〇円
経済・経営統計演習　阿部克己　四九四〇円
管理会計　古川浩一・佐藤宗彌　一七五〇円
労使の関係　桑原靖夫　二五八〇円
地域経営　岡崎昌之　一八五〇円
企業経済と情報・戦略　黒澤一清編著　三八一〇円
社会福祉論　松村祥子・三ツ木任一編著　二一六〇円
民俗文化史　宮田　登　一七五〇円
国際社会学　梶田孝道編著　一七五〇円
東南アジアの日本企業の工業生産　熊谷智徳編著　二七八〇円
都市経営　小泉允圀・林　亜夫編著　二五八〇円
発展途上国産業開発論　河合明宣編著　二〇六〇円
情報工学〈三訂版〉　都倉信樹　二五八〇円
エネルギー工学と産業・社会　牛山　泉　二三七〇円
エレクトロニクス入門　小川鑛一・富田英雄編著　二六八〇円
計算の理論　野崎昭弘・仙波一郎　三三〇〇円
微分積分学Ⅱ　斎藤正彦編著　二〇六〇円
線型代数Ⅰ　高橋礼司　二〇六〇円
応用数学〈改訂版〉　藤田　宏編著　二五八〇円
数学基礎論　隈部正博　一七五〇円
パソコンによる解析入門　森本光生　二七八〇円
物理科学史　橋本毅彦　二一六〇円
相対論　藤井保憲　二八八〇円
物質の科学・物理化学　平川暁子・土屋荘次編著　三〇九〇円
化学熱力学　池上雄作編著　二五八〇円
動物の進化　野田春彦編著　二六八〇円
植物と菌の系統と進化　岩槻邦男編著　二二七〇円
現代生物学　毛利秀雄・平本幸男編著　二六八〇円
宇宙観の歴史と人間　金子　務　二六八〇円
太陽系の科学〈三訂版〉　小尾信彌・吉岡一男編著　二六八〇円
日本列島の地球科学　濱田隆士　二三七〇円
スペイン語Ⅰ（'95）　山口羔正　二〇六〇円

〔教師教育ビデオ教材＝VHS放送教育開発センター編　いずれも定価各一四〇〇〇円〕

○新教育課程の授業
—小学校・国語—低学年の作文指導（45分）
○新教育課程の授業
—小学校・社会—宅配便のひみつを調べよう（35分）
○新教育課程の授業
—小学校・算数—4年　およその数の使い方（40分）
○新教育課程の授業
—小学校・算数—6年　四角錐の体積（50分）
○新教育課程の授業
—小学校・理科—第1部5年・第2部6年（50分）
○新教育課程の授業
—小学校・環境教育—小学校社会科・家庭科（30分）

〔学部教育ビデオ教材＝VHS放送教育開発センター編　いずれも3巻セット各定価六〇〇〇円〕

○博物館学芸員の仕事—有形民俗資料—
○博物館学芸員の仕事—無形民俗文化財—

■明星大学出版部
現代社会教育の課題　高島秀樹　神山敬章編　三九一四円

■早稲田大学出版部
新時代の社会哲学—近代的パラダイムの転換—

コンピュータ時代の経済学入門―2部門経済モデルの一般均衡論―　田村　正勝　三二〇〇円
C・ディンウェディ、F・テール／山岡道男訳　三五〇〇円
東京の先端風景〈早稲田大学理工総研シリーズ2〉　尾島　俊雄　二〇〇〇円
オークショットの政治哲学〈政治思想研究叢書〉　中金　聡　四五〇〇円
エリザベス朝喜劇10選　第Ⅱ期・全10巻／第1回配本
2　マザー・ボムビー　J・リリー／大井邦雄訳　二三〇〇円
古代探叢Ⅳ―滝口宏先生追悼考古学論集―
同論集編集委員会・早大所沢校地埋蔵文化財調査室編　二〇〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　国書篇第三期
第44巻　南総里見八犬伝稿本㈢　柴田光彦編　一八〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇第一期
第1巻　蘭学者　肖像・遺墨・書簡集　杉本つとむ編　二八〇〇〇円

■名古屋大学出版会
移住民の秩序―清代四川地域社会史研究―　山田　賢　六一八〇円
核融合研究Ⅱ―核融合炉工学―　池上英雄編　三〇九〇〇円
近代ドイツ＝「資格社会」の制度と機能　望田幸男編　五六六五円
士族の歴史社会学的研究―武士の近代―　園田英弘／濱名篤／廣田照幸　五六六五円
韓国近代大学の成立と展開―大学モデルの伝播研究―　馬越　徹　六四八九円
日本電力業の発展と松永安左ヱ門　橘川　武郎　六六九五円
整形外科医のノウハウ・ポイント　岩田久／見松健太郎／佐藤啓二／長谷川幸治編　四六三五円
日本の都市化と社会変動　春田　尚徳　六一八〇円
福沢諭吉と西欧思想―自然法・功利主義・進化論―　安西　敏三　八二四〇円

■京都大学学術出版会
日本財政論―数理財政学序説　吉田　和男　三五〇〇円
Local Economy and Entrepreneurship in Thailand : A Case Study of Nakhon Ratchasima　上田　曜子　三〇〇〇円

■大阪経済法科大学
近代日本経済史序説　滝沢　秀樹著　二七八一円
外国人労働者問題の展望〈法学研究所研究双書①〉　本多淳亮・村下　博編　三〇九〇円

■関西大学出版部
EMMA vol. 1　関西大学ジェイン・オースティン研究会　五〇〇〇円
'Temptations' from Ancrene Wisse vol. 1　和田　葉子編著　五〇〇〇円
示談と損害賠償　高森　八四郎　五〇〇〇円
聖域の伝統文化　黒田　一充編　一七〇〇円

■九州大学出版会
国民経済計算と国民所得　武野　秀樹　四三二六円
統計情報論　大屋　祐雪　五一五〇円
Progress and Prospects of Organophosphorus Agrochemicals　江藤守總＆J・E・キャシダ編　四一二〇円
Geographical Diversity of Isozyme Genotypes in Barley

行為と価値の哲学　小西　猛朗　三二九六円
子どもの仲間集団の研究　岡部　勉　五三五六円
ロード・バイロン『チャイルド・ハロルドの巡礼』第一編、注解　住田　正樹　九二七〇円
未来への視点を探る〈九州産業大学公開講座6〉　田吹長彦編　五九七四円
行政学のデジャ・ヴュ―ボナン研究―　九州産業大学公開講座委員会編　二〇〇〇円
The Wisdom of Hagakure―Way of the Samurai of Saga　渡邊　榮文　三九一四円
Domain　S・B・デイ&井口　潔共著　三五〇〇円
Design of Amenity　安藤由典・坂本武司編　一二三六〇円
市場経済の思想像〔増補版〕　中村廣治編著　三二九六円

■流通経済大学出版会

■大阪大学出版会
食中毒学入門―予防のための正しい知識―本田　武司　一六〇〇円

☆　☆　☆　☆　☆

●製作の現場から　10

帯のいのちは短くて…

▼それほど寝相が悪い方ではないはずだ（と、自分では思っている）。にもかかわらず、旅館の浴衣を着て寝ると、目覚めれば天才バカボン。帯などといういいかげんなもので衣服をとめようとする発想が問題だ（と、私は固く信じて疑わない）。

▼すぐにだらしなくなるのは本の帯も同じ。書店の棚を見ても、上の方にずれていたり、ゆるんでいたり、破れていたりする。読むときにはもちろん鬱陶しいから、私は本を買うと帯は即座に捨ててしまう。「書誌学的に意味がある」とか、「編集者の思いがこもっているのだから、大切にとっておくべきだ」とかの意見もあるが、そんなことを言えばきりがない。雑貨屋のチラシだって、文化史・社会史の貴重な史料だ。「帯があった方が古書店で高く買ってくれる」というのは正解だが…。

▼帯の役割は、本と読者の出会いの仲立ちにある。帯のメッセージに惹かれて本を手にとり、目次を見て、「あとがき」を斜め読みして、そのままレジに向かってくれれば大願成就・大往生。帯はその生涯を終える。

▼短い生涯であればこそ、精いっぱい頑張って生きてほしいのが親心。とはいっても、編集者がその本の内容と性格をしっかり把握していなければ、帯が逆効果になることだってあるだろう。私など二十数年も編集者をやってきて、「これは」という帯が書けたためしがない。

▼とりあえず技術的に心がけているのは、目と平台の距離を置いて、多少目が悪くても読める大きさの文字を、一部分ではあっても使用すること、なるべく文節の途中で改行しないようにすることぐらいだろうか。用紙や印刷方式も検討すべきだが、ついつい従来のパターンを踏襲して、お茶をにごしているのが実状だ。（おびしろ・はだか）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北９条西８丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎１－１ TEL. 048-725-0324 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田２―19―30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘２―16―５ 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園６―１―１ TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742―１ TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷２―28―４ TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷７―３―１ 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町２―２ TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘１―１―１ TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町２－14－１ TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門１―14―１ 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保２―１―１ TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町１―103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町１ 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺６―10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町３―３―35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎７―１―146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘１―1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第25号) '95春 平成７年４月１日発行 発行所 大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番１号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円 〒共